手にまつわる怪談——ハーン、ルファニュ、モーパッサン

平川祐弘

要旨

ハーンの『因果話』は松林伯円の『百物語』を基に英語で再話した怪談だが、嫉妬した女の手が、死後も相手にくっついたまま離れないという恐ろしい話である。ハーンは原作者と違って平和な風景の中で話を始めることで怪談の効果的な結びをきわだたせた。アイルランドの怪談作家ルファニュも The Hand という作品で白い手という身体の一部分の神出鬼没を描いたが、その手が出没する動機が説明されておらず、そこに読者の側の不満が残る。読者は怪談の中でも合理性のある話の筋を求めているからである。超自然的な現象であろうともハーンの『因果話』には女の嫉妬という動機があった。同様にモーパッサンの La Main にも復讐という動機が超自然的な、切断され、鎖に繋がれた手による相手の殺害を説明している。モーパッサンの『手』を読むと、その中に用いられた蜘蛛のイメージをハーンが『百物語』を再話する際にも用いたことが知られる。ちなみにハーンはモーパッサンの『手』の英訳者でもある。

キーワード：怪談、『因果話』、ハーン、ルファニュ、モーパッサン、松林伯円、手、ghostly connection

ハーンとアイルランド

狭くはアイルランド、広くはケルトの文化との関係の中で、ハーンの手にまつわる怪談を論じたい。そもそもハーンとアイルランドとはどのような関係にあるのか。

ラフカディオ・ハーンはギリシャの島で一八五〇年に生まれたが、父親が英国系アイルランド人の軍医で、幼年時代をダブリンで過ごした。二歳の時から十年近くである。瞼の母に別れた後、世話をしてくれた女中はコンノートの出身で名前はキャスリーン・コステロ（結婚後ローナン）といい、ケルトの民話も聞かせてくれた。ハーン自身もゲーリック語は聞いて多少わかったといっている。しかしハーンはギリシャ人の母を捨てたアイルランド人の父親を憎み、自分がアイルランドの守護聖人にちなんでパトリック・ラフカディオ・ハーンと呼ばれたことも不快に感じていた。それでアメリカへ移民した後、パトリックの名前を捨て、生まれの島のレフカスにちなんだミドル・ネームのラフカディオをもっぱら用いた。ハーンはそれほどアイルランドを思い出したくなかった人なのである。

ハーンはそのようにして父方、すなわちアイルランドに関する記憶を長年意識的に抹殺していた。そんなハーンだったが、自分とアイルランドの結び付きが意外に根深く大事なものだと了解するにいたったのは、文筆家としての名声も確立し、自分の過去の暗い面も明るい面もともに大いなる肯定のうちに見直すことが出来るようになった晩年、明治三十四年の頃だったようである。近年発見されて話題を呼んだ一九〇一年九月二十四日付けのイェイツあての手紙にはこう出ている。なお文中の *ought* には保留はあるものの、ハーンがアイルランド人の相手を喜ばすために本心を曲げてまで言った表現とは私は考えない。*ought* は相手のイェイツとの関係よりも、アイルランド的なるものを愛することをかたくなに拒んだ過去の自分との関係で出た表現ではあるまいか。

……But forty-five years ago, I was a horrid little boy who lived in Upper Leeson Street, Dublin ; and I had a Connaught nurse who told me fairy-tales and ghost-stories. So I *ought* to love Irish Things, and I do.

ハーンはマルティニーク島でも日本でも怪談にひきこまれ、怪談に対して抑えがたい興味を抱いた。ハーンの怪談が迫真の力を持つのはハーン自身が亡霊の存在を強く感じていたからである。五十歳を過ぎたハーンは、自分自身のそのような内的な衝動と幼時から耳にしてきたケルトの超自然的な霊の世界とが実は深くかかわっている、と悟ったのであろう。そしてそのころ自分より十五歳若いイェイツの作品を読み、自分自身の内的世界との共通性を感じ、東大の講義でもとりあげ、イェイツと文通したのであろう。ハーンの日本とイェイツとアイルランドとを結ぶ関係を ghostly connection と私が呼ぶ所以である。世の中には、この世の人でなくあの世の人を通して結ばれるきずなというものもまた存在するのである。

ハーンとイェイツの二人は共にキリスト教信仰をなくしていた。普通、キリスト教西洋社会ではそのような人は大づかみに分類されて、agnostic 不可知論者とされてしまう。世間もそうみなしたし、実は本人もそう思っていた節がある。日本でハーンと親しかった雨森信成もそう書いた。しかしハーンもイェイツも単なる唯物論者ではない。なるほど宗教者ではないが、宗教的な感受性の持主である。二人はこの現象界の外にある、目に見えない神霊的な力に感応していた。日本人の多くも自分は無宗教だといっているが、神社にお参りすれば柏手を打つ人が多い。日本人は口先では無宗教、すなわち不可知論者と称しているが、実はハーンやイェイツと同様、神霊的なるものの働きに強い興味を感じている人が多い。怪談を聞いてこわがる、ということ自体、私たちが ghost の世界に関心をもっていることを示している。怪談にひきこまれるということ自体、実は私たちが唯物論者でない証拠なのである。

ハーンやイェイツはまた先史時代からの生命力が大いなるうねりをなして精神に働きかけている土地としてアイルランドと日本を把握していた。世界の西と東のさいはての島国には土着の神々がいて、それが外来の大宗教に押し付けられていることを了解していたのである。アイルランドは今日でも中層下層には熱烈なカトリック信者が多いが、それでいて自分たちはキリスト教に征服された国民だという意識もまた強く持っているらしい。そのような意識は後に英国に政治的に征服されたから生じたものかもしれないが、アイルランドに比べて他のヨーロッパ地域では自分たちがキリスト教に征服された、と自覚している人々の割合ははるかに少ないのではあるまいか。その引き裂かれたアイデンティティーのゆえに激しく熱狂し、またそれが文学の土壌ともなっているのではあるまいか。

さてイェイツは土着の ghostly な伝統に関心があった。そのイェイツは内外の ghostly な物語をあらかじめ読んでいたからこそ、フェノ

ロサ・パウンド訳の夢幻能の世界にもいちはやく入り得たのであろう。夢幻能の世界は怪談の世界や神道の世界と通底する ghostly な世界なのである。夢幻能はパウンドによって Noh of spirits とか Plays of Spirits などと英訳されたが、シテが物の怪(け)や死者の霊、すなわち ghost であることが特色である。その ghost psychology の把握のすばらしさにパウンドは心打たれた。イェイツもパウンドもそうした特性をいちはやく了解した。パウンドのごときは能においては仏教よりも神道こそが大切なのだということをいちはやく察知していた。そんなパウンドの日本認識がいかなるものであったかは厳密な調査に値すると思う。能に登場するワキの仏僧は、舞台をしめくくるためのデウス・エクス・マキナ、いわゆる機外神、の役割を果たすためだけの存在であることが多く、能の世界の宗教は仏教的なものが必ずしも主流ではない。神事にまつわる能に限らず、夢幻能に広く見られる物の怪であるとか、霊的なるもの、土地にゆかりの亡霊などは広い意味でのアニミスティックな存在であり、実はきわめて神道的なものなのである。

イェイツの日本認識がいかなるものであったかも厳密な調査に値すると思うが、彼が晩年にいたるまで日本に対し愛着を抱いていたのは事実のようで、その際ハーンのことが念頭にあったらしいことは、一九三四年に『復活』を書いた時、初版の序文に「古い民族はみな魂の再生を信じている。ラフカディオ・ハーンが日本人の間にみたように、その証跡を体験を通して知っていたであろう」と書いたことによっても知られる。ハーンについては、ハーンが ghostly Japan に関心を寄せたという事実によって、後来の研究者にとってはハーンと ghostly Ireland との関係がやはり話題となりうるわけである。

以上、ハーンとアイルランドの接点についてさらに調査すればよいと思われる点を二、三参考までに述べたが、しかし他方、次の点についても注意したい。それというのは日本社会には学問的規律について一般に締りのない面がある。ものを書くとき注や出典を記さない。アイルランド関係について注意すると、さしたる根拠もなく、なにかというと話をアイルランドやケルトに結びつけたがる、贔屓の引き倒しに類したことが学問的素人やアマチュア・グループの間で横行している。熱心家であればなんでも許されるというものではない。たとい素人の集まりであろうとも、はしたない真似は慎んでいただきたい、というのが私の希望である。

では真面目な仕事をするためにはどうすればよいか。本居宣長もいうように初心者にも根気よくやればできる仕事はある。地道な実証的な研究をしっかり行なえばよいのだが、しかしそれについてはまず先行研究をきちんと押さえておくことが大切であろう。しかしハーンの

怪談についてアイルランドとの結びつきをしっかりおさえた調査や研究はまだないというのが実相ではあるまいか。

ここでアイルランドとの関係は抜きにして、ハーンの怪談・奇談についての研究動向を一瞥すると、まず第一段階として日本語の原拠とハーンの再話の相違が近年研究の対象となってきた。この分野ではたいへん成果があがっている。ハーンの再話については日本の原拠との関係のほかに、研究の第二段階として西洋的要素の混入や刺戟もまた指摘されてきた。白い雪に包まれて兄弟が死ぬ『鳥取の布団の話』についてはアンデルセンの『マッチ売りの少女』の末尾の場面、『持田の浦の民話』についてはスコットランドのバラード、『おしどり』についてはフロベールの『聖ジュリアン』が影を落としている、とは確言できるのではあるまいか。『むじな』についても先行体験がアイルランド時代の幼年期の従姉ジェーンの思い出にも、またアメリカ時代の体験にもあることが指摘されている。

それでここではハーンの『因果話』その他について、これを主として手にまつわる怪談として考え、日本語原拠の関係とともに西洋語作品との関連も多角的に眺め、参考に供したい。影響関係が必ずしもあるというわけではないが、アイルランドの怪談にも言及させていただく。

ハーンの『因果話』

本論に入る。話題とするIngwa-banashi『因果話』という怪談はハーンの *In Ghostly Japan*(1899)に収められている。話の筋はこうである。文政十二年春四月、大名の奥方が死に瀕して、側室の雪子に来てもらう。奥方が言う。

「ああ、雪子、よく来てくれたね。わたしはもう長くはありません。わたしが死んだら、おまえにわたしの代わりをつとめて欲しい。いつも殿の御寵愛の深いあなたでした。殿の御正室となるように」

「なにをおっしゃいます」と雪子はいうが、奥方はその願いを繰り返し、最後に庭の満開の八重桜を見たい、といい雪子におぶっておくれ、と頼む。すると死にかかった奥方は、雪子の肩にしがみつき、痩せた両手を雪子の肩から着物の下へすべりこませ、その両の乳房をつかむや、高らかに笑い声をあげて死んでしまう。だがその手は雪子の乳房を離れない。オランダ人医師[1]に手首のところで切断してもらった

が、ひからびた死人の手は雪子が出家した後もその乳房についたままである。しかも毎夜胸をしめつける。十八年経ったいまも締め付けるという恐ろしい話である。

ここで一般的な感想を申し添える。一部のフェミニストは法律的平等と生物学的平等を混同して、男女の性差は後天的に文化によって作られたもののように言い立てているが、はたしてすべてがそうだろうか。ハーンは女の嫉妬や執念は男の嫉妬とは本能的に違う独特の恐ろしさがあると考えたようである。そしてそのハーンの見方に真理が秘められているからこそ『因果話』であるとか『破られた約束』であるとかの、女の同性に対する嫉妬の話は読者に永く訴え続けるのであろう。今日のご時世では迂闊にフェミニストを批判すると、執拗に反撃を喰らい噛みつかれるので、世間は怯えて萎縮している。お利口さんは口を閉ざして本心を語らず批判を控えているが、しかし私見ではそのラディカル・フェミニストの執念深い反撃こそやはり女性独特のものであって、その噛み付き方に男女の性差がおのずと示されているように思われるが、いかがであろうか。

では本題に戻って奥方の雪子にたいする噛み付き方はどうであったか。いま筋を述べた『因果話』の問題の条りのハーンの英文を参考までに読むとこうである。

"Ah, here is Yukiko !...I am so pleased to see you, Yukiko !...Come a little closer.... Yukiko, I am going to die. I hope that you will be faithful in all things to our dear lord ; —for I want you to take my place when I am gone.... I hope that you will always be loved by him—yes, even a hundred times more than I have been—and that you will very soon be promoted to a higher rank, and become his honored wife.... And I beg of you always to cherish our lord : never allow another woman to rob you of his affection.... This is what I wanted to say to you, dear Yukiko.... Have you been able to understand ?"

"Oh, my dear Lady," protested Yukiko, "do not, I entreat you, say such strange things to me !.... how could I ever dare to aspire to become the wife of our lord !"

奥方は雪子が殿の正室となることを重ねて望み、死ぬ前に庭で満開の八重桜を一目見たい、と言い、雪子におぶってくれと頼む。乳母が子供に背を向けるように、雪子が奥方に背中を向けると奥方はこう言った。

"Why, this way!" —responded the dying woman lifting herself with an almost superhuman effort by clinging to Yukiko's shoulders. But as she stood erect, she quickly slipped her thin hands down over the shoulders, under the robe, and clutched the breasts of the girl, and burst into a wicked laugh.

"I have my wish!" she cried—"I have my wish for the cherry-blossom."

松林伯円の『百物語』

このハーンの話の原拠は『百物語』第十四席にあり講談社学術文庫の『怪談・奇談』に復刻されている。『百物語』では一夜の宿を乞うた巡礼の尼が「いと悲しげなる虫より細き声にて南無阿弥陀仏」を唱えている。主人はじめ家の者が問い詰めると、

旅尼は漸々重き顔を揚げ「今迄丁度十八年深くも包む因果咄、御主人始め皆さんがお進めに黙止難く浅間しくも又恥かしく又恐ろしい此身の素性お咄し申す其前に一寸御目に掛る物あり。是れぞ今年で十八年夜の丑満の時分になると私しの胸を責悩ます其種は是れ此通りの物なり」と尼が諸肌押脱ばコハ抑如何にコハ如何に、尼が乳房の左右の上より乾しかためたる如くに見ゆる二本の腕、……

主人以下皆茫然と見つめている。主人の倅の嫁、すなわち語り手の松林伯円の姉もただ茫然とみつめている。そこで尼は奥方の臨終の日のことを語りだす。だがハーンはこの種明かしから始まる回想形式の順序を取らなかった。ハーンは奥方の末期の場面で話を始める。しかもハーンの英文『因果話』ははじめは地の文も淡々とした事実の提示で次に来る夫の大名の優しい言葉もそれに対する奥方の返事もきっち

りと礼儀正しくて、奥方が雪子に対し異常なまでの嫉妬を秘めていたという節はまったく見られない。それだから、奥方が若い女の乳房をぐっとつかんで、

「これで願いが叶った！」

といって不気味な笑いを立てた情景が、それだけますますぞっとさせるのである。怪談には話に山がなければならないが、この奥方の手が雪子の乳房に貼り付いた時がそれである。それはどんでん返し、平安な儀礼の世界からおぞましい邪悪な嫉妬の地獄への転調でもあるわけだ。この予期せざる事態の急変こそが怪談の命であるといえよう。怪談も手品と同じことで、先に種明かしをしてしまってはならない。先に種明かしをされては興醒めしてしまう。ハーンが選んだ再話の順の方が、読者に与えるショックも大きく、効果的な叙述といえるのではあるまいか。

なおこの『百物語』第十四席の松林伯園の原話とハーンの再話 Ingwa-banashi の関係は牧野陽子氏によって詳しく論じられており、『比較文学研究』四十七の牧野論文はたいへん行き届いている。だから原作と再話の関係はそちらに譲ることとしてその点についてはこれ以上論じないこととする。

ルファニュの『手』

ここではそれで、ハーンがこの日本の怪談を耳にした時、思い浮かべた西洋の作品はあったのであろうか、それからなにがしかの影響を受けているのであろうか、という点を問題としたい。あるいはそうした影響関係はかりになかったとしても、『因果話』と西洋の怪談を比較してあれこれ論じてみたい。そうすると、たとえ影響関係はなかったにせよ、それぞれの特色が浮かびあがるのではあるまいか。

しかし比べるからには複数の作品の間に共通の要素がなければならない。比較しうる作品として『因果話』執筆時のハーンには、アイルランドの怪談作家ジョゼフ・シェリダン・ルファニュ Joseph Sheridan Le Fanu (1814—1873)が一八六一年に書いた“The Hand”であるとか、フランスのモーパッサンMaupassant (1850—1893) の——“La Main d'écorché (1875)は単行本に未収録のためハーンの目にふれなかった

としても、それと同工異曲の――“La Main”(1883)が思い出されたであろうと私は推測する。ちなみにこの後者をハーンはアメリカ時代に“The Hand”と題して一八八六年に英訳している。そうした次第であるから、ハーンとルファニュとモーパッサンの三篇における手の役割を中心に比較論評してみることとする。

ハーンは東京大学における英文学講義でもアイルランド文学に特別に時間を割くとか力説するとかいう傾向はなかったように思われる。それでも世界の大学でイェイツについて最初に言及したのはハーンの東大講義だそうである。誰かハーンが英文学講義の中でふれたアイルランド文学について一度丁寧に検証してみてはどうだろうか。ハーンは講義中にルファニュについては何度か言及していたと『小泉八雲事典』にヒューズ教授が書いているが、学者として不見識なことに、それがどこであったか典拠がきちんと書かれていない。実は私も記憶していない。ハーンはルファニュの怪談として代表作の『手』を読んでいたかもしれない。読んでいなかったかもしれない。話のあらましはこうである。

ミス・レベッカ・チャッツワースが一七五三年の晩秋の手紙で語ったところによると、瓦葺の屋敷――Tiled House あるいは Tyled House――の件でダブリンのハイ・ストリートに住むハーパー氏と彼女の主君のカスルマラード氏の間に妙な争いが起きた。カスルマラード氏は屋敷のまだ若い相続人の母親と従兄の間柄なので、この屋敷がある地所の管理の仕事を引受けていた。ハーパー氏はプロッサーという男と結婚した娘のためにその屋敷を借りることに同意し、いろいろ手直しもした。六月にプロッサー夫妻は移り住んだが「どうしてもこの家には住めない」といいだした。娘の父のハーパー氏はカスルマラード氏にその旨を告げた。「この家は祟られている。取り壊した方がいい」

手紙にはこう出ている。面倒な事態は八月末までは起こらなかった。ある夕方プロッサー夫人がたったひとりきりで裏手の居間に坐って外の果樹園の方を開け放した窓越しに眺めていると、外側の石の窓枠にこっそり手を掛けたものがいる。よじ登るつもりらしい。手しか見えなかったが、短くて華奢な造りで白くてむっちりとしていた。窓の敷居にその手が掛かっている。若い人のではない、年配四十過ぎの男の手だと思った。恐ろしい強盗事件があったのはつい数週間前で、この手は瓦葺家敷に押し入ろうとする悪党の一人の手に相違ない。プロッサー夫人は恐怖のあまり絶叫を発した。と同時に手はすっと静かに引っ込んだ。

いま述べた条りの英語原文を示すと、

…Mrs. Prosser, quite alone, was sitting in the twilight at the back parlour window, which was open, looking out into the orchard, and plainly saw a hand stealthily placed upon the stone window-sill outside, as if by some one beneath the window, at her right side, intending to climb up. There was nothing but the hand, which was rather short, but handsomely formed, and white and plump, laid on the edge of the window-sill ; …She uttered a loud scream and an ejaculation of terror, and at the same moment the hand was quietly withdrawn.

果樹園や窓の下を調べたが、足跡は見つからない。そもそも植木鉢がたくさん壁沿いに置いてあって誰も壁に近づけるはずもない。その夜、今度は台所の窓をこつこつ急いで敲く音がした。女たちは怯えたが、下男が銃を取って裏手のドアを開けたが、なにもなかった。ところがドアを閉めた時、どさっとドアにぶつかる音がして、中に入ろうとする者の圧力が感じられ、下男も怯えきって、窓を敲く音は続いたけれども、外を探ることはもはやしなかった。

土曜日の夕方六時ごろ、料理番の年のころ六十の女が台所で一人でいると、窓ガラスにやはり肉付きのよい貴族的な手の掌(てのひら)が窓ガラスの表面を上下に動かしているのが見えた。料理番は叫び声をあげ、祈りの文句めいたものも唱えたが、手が消えたのは数秒間後のことだったという。

怪談の特色は事件にまきこまれた者と話者との関係を述べ、事件の日時をきちんと語り、真実性を強調するのが常套手段で、その点は松林伯円もルファニュも同じである。伯円は『百物語』では自分の姉が嫁いだ先の下野の国の薬師寺の東の田中村の野口伝五左右衛門のところで聞いた、という形をとっている。ハーンも作品の末尾に姉は略しているが地名はあげている。それから怪談では反復という手法もしばしば用いられる。ルファニュの話では手は繰返し現れる。音を立て、目に見える形、また目に見えない圧力の形で現れる。最初のうちは裏手の部屋のドアや窓だったが、火曜日の夜九時半ごろ今度はホールのドアを初めは低くこっそりと、だが次第に高く乱暴に、窓ガラスを破

らんばかりに敲く。それがなんと二時間近くも続いた。こうなると若奥様もおびえずにはいられない。それから数日間は静かだったが九月十三日の夜イギリス人のメイドが食器室にはいったら、シャッターをボルトで締めるための窓枠に掘られた小穴から白いずんぐりした指が最初は指先が、ついで第二関節までのびてきた。メイドは台所に戻って気を失った。主人のプロッサー氏はおびえる家人を馬鹿にして、これは性質の悪い悪戯だ、犯人を現場で取り押さえてやると意気込んでみせた。下男で誰かが外部と通じているのだろう、とも考えた。それで信用している下男にも拳銃を持たせ、自分も二挺ピストルを持って敲く音のするドアの方に向かった。相手は調子にのってドアを二回ずつ立て続けにノックしている。そこでドアを勢いよく開けたが何も見えない。しかし奇妙なことに自分の右腕が押し上げられて何かが下を潜り抜けたような感じがして、慌ててドアをばたんと閉めた。それからというものプロッサー氏も口をきかなくなった。相手が家の中にはいった、と信じたからである。夫人にはなにも言わなかったが、早めに寝室に行き、聖書を読んでからしばらくまだ起きていた。すると十二時十五分過ぎごろ寝室のドアを軽く叩く音がする。「誰だ」とプロッサー氏は躍り上がって叫んでドアの内から鍵をかけた。翌朝メイドは客間のテーブルの上に掌の痕がくっきりついているのでぎょっとする。砂浜に人の足跡を見つけたロビンソン・クルーソーとてもこれほど驚きはしなかったに相違ない。プロッサー氏は家人の手形をみな調べたが、誰の掌とも合致しなかった。

そのころから夫人は悪夢にさいなまれるようになった。ある夜夫が寝室に入ると静かで妻の寝息が聞こえない。ベッドのカーテンを引いて燭台をかざして覗き込むと、顔面蒼白で冷や汗におおわれて動きがない。死んだ、と思った夫が見たのは枕の上、妻の頭の横、カーテンの中に例の白い小太りの手で、指がゆっくりと波のように動きながら妻のこめかみの方に伸びてくる。プロッサー氏は一声喚くや腋の下に抱えていた義父の仕事台帳をカーテンの背後に投げつけた。そこに手の主は突っ立っているに相違ないと思ったからである。手はさっと引っ込んでカーテンは大きく揺れた。プロッサー氏はベッドを回って向こう側に行くとその先の衣裳部屋のドアがその同じ白い手で閉められるのが見えた。ドアを一気に開き中を見たが人影はない。妻のドレスが壁に掛かり、鏡台が窓に面して光っている。

夫人の寝息が聞こえないとプロッサー氏が異常に気づく場面の英語原文を示すと、

There was a candle burning on a small table at the foot of the bed, besides the one he held in one hand, a heavy ledger connected

with his father-in-law's business being under his arm. He drew the curtain at the side of the bed, and saw Mrs. Prosser lying, as for a few seconds he mortally feared, dead, her face being motionless, white, and covered with a cold dew ; and on the pillow, close beside her head, and just within the curtains, was the same white, fattish hand, the wrist resting on the pillow, and the fingers extended towards her temple with a slow, wavy motion.

Mr. Prosser, with a horrified jerk, pitched the ledger right at the curtains behind which the owner of the hand might be supposed to stand. The hand was instantaneously and smoothly snatched away, the curtains made a great wave, and Mr. Prosser got round the bed in time to see the closet-door, which was at the other side, drawn close by the same white, puffy hand, as he believed.

He drew the door open with a fling, and stared in ; but the closet was empty, except for the clothes hanging from the pegs on the wall, and the dressing-table and looking-glass facing the windows...

バタンとドアを閉めて鍵をかけた。ベルを鳴らして召使たちを呼び、失神していた夫人を正気に呼び戻した。さらに困ったことは長女が恐怖におびえ始めたことで、抱いている間はいいが、ベッドに寝かせると五分も経たぬうちに金切り声を発する。そして子供の目が見つめる先にそのおびえの原因がいるのが母親にも乳母にも見えた。食器棚の扉がきちんと閉まらない。その隙間から例の手が子供の頭めざして伸びてくる。母親は悲鳴をあげて子供を取り上げるや下の寝室へ駆け下りた。そしてプロッサー氏が寝ている部屋に入って鍵をかけたが、かけるやいなやドアを敲く音がした。

この調子で話は続く。ところで読者でありかつ説明者である私にとって困ったことに、ルファニュの怪談はこの手は何か、一体何の恨みで瓦葺屋敷に夜な夜な出るのかその説明なしに話が終わってしまうことである。それで私は読んで種明かしがないという裏切られた感じを持った。読者諸氏もそうではないかと思う。しかし白いふっくらした貴族的な一本の手だけがガラス窓の向うに張り付くというところに不気味さがある。

藤原万巳氏は『人文学研究福岡女学院大学人文研究所紀要』四、二〇〇一の『因果話』試論で「断片化する身体」という見方を示した。

部分が不釣合いなほど大きな意味をもつ例として『因果話』における奥方全体が乗り移ったような手首——雪子の乳に張り付いた手のことを話題とした。手首というのは身体の一断片だがそれが自律した意思のある主体となっているというのが藤原氏の見方である。[ii] しかしオランダ人医師に手首のところで切断してもらったというハーンの再話の場合にせよ、蘭方医に両手を残したまま切断してもらったという松林伯円の原話の場合にせよ、この張り付いた手が何であるか、その手の元の所有者は読者にわかる。『因果話』の主題はあくまで妻の座を守りたかった女の嫉妬がこういう形をとったので、それだけに話も首尾一貫して完結している。手が張り付くというのは本来ありえないことだが、そしてそれが『百物語』の怪談たる所以となっているが、それでも話としては辻褄があっているという印象を読者は受ける。そこが実は存外大切なのである。怪談の聞き手は、超自然的なことについての話の中にも、話としては筋の通った説明を求めているものなのである。その点、ルファニュの場合は主題が何なのかわからない。手が誰の手であるかがわからない。ということは犯人の正体が誰だかわからない。土地台帳らしいものを脇の下にかかえて、という一節が出てきた時、さては土地や館を奪われた元貴族の恨みかと思ったが、そうでもないらしい。要するにこのルファニュの怪談には種明かしがない。その点が私には物足りない。もっともただそれだけ白い五本の指が波打って長く伸びるルファニュの手を、不気味だと感じる向きもいるだろう。ルファニュの場合は人間の嫉妬といった人間の喜怒哀楽愛悪という六情の次元での怪談ではない。それではより純粋な恐怖そのものを描くことを意図した作品かというと、どうもそうではなくて、ダブリンで老人から怪談を聞いたが、それがもともと落ちのない話だったということなのではあるまいか。ルファニュはエドガー・アラン・ポーと同系統の推理作家 ratiocination の名手といわれるが、『手』はその肝心の推論なしに終わったという尻切れとんぼの感を否めない。なお彼の作品は *Irish Ghost Stories* などにも収められている。ちなみにアイルランドの怪談の特徴は酔っ払いが多く登場することで、ハーンの怪談とはその点が違う。日本でも一般に怪談は野卑である。アイルランドでも同じなのではあるまいか。小泉八雲の怪談の芸術的洗練というのは格別ななにかではあるまいか。

モーパッサンの『手』

次に『因果話』の再話に際してハーンが確実に思い出した手にまつわる作品にふれたい。それはハーン自身が英語に訳したモーパッサンの『手』（一八八三）で、その話のあらましはこうである。作者はここでもご婦人連に取囲まれた予審判事がコルシカで勤務していた頃の思い出を物語るという枠を設定する。さてベルミュティエ判事が当時取り扱った事件はヴェンデッタにかかわるものが大半を占めていた。メリメの『マテオ・ファルコーネ』（一八二九）などで知られるように、コルシカでは復讐の風俗が根強く残っている。入江の奥に一英国人が小さな別荘を借りた。道すがらマルセーユでフランス人の使用人を一人雇って連れて来た。村人はこの英国人の噂で持ち切りだが、本人は狩り釣りのほかは人とつきあわない。アジャックシオの町にも出て来ない。毎朝一時間か二時間、ピストルや銃の撃ち方の練習をしている。いろいろな噂が立つものだから判事として多少身元も知りたいと思ったがわからない。名前はサー・ジョン・ローウェルといった。それでも知合いになろうと機会を狙って自分も狩に出て、ある日、ローウェル氏の目の前で山鶉（やまうずら）を打ち落とした。自分の犬が獲物をくわえてきたが、自分は失礼したといってその獲物をローウェル氏に受取ってもらった。こうして付き合いも始まった。

狩猟の話をすると、この英国人はアフリカで河馬、虎、象、ゴリラの狩をしたとその詳細を話してくれた。「そうした獣は恐ろしいでしょうな」「いや、一番おそろしいのは人間です」そう笑いながらその英人は「自分は人狩りをしたこともある」と言った。別荘の室内には金で縁取りされた黒絹の布が張られており、黄色い大輪の花が布地の上にあしらわれていて火のように輝いていた。「日本の布です」

しかし判事の目を惹いたのは、壁の大きな鏡板の中央に赤いビロードの布が四角に張られ、そこから黒い物が突き出ていたことである。近づいたら手であった。人間の手で、干からびた手で爪は黄色く、血が染みた痕がありそれが垢のようにこびりついていた。前腕の中央あたりで斧でばっさり切られている。手首に鉄製の鎖が巻かれていて壁の金輪に留められている。象でもつなげそうな頑丈なチェーンと金輪である。

「これは何ですか」

「私の最良の敵で、アメリカでサーベルで真っ二つに斬られて、皮を剥がされて、八日間炎天の太陽の下で日干しにされました」
「この男はさぞかし強かったでしょうな」
「いや私の方が強かった。私が鎖を巻きつけて取り押さえました」
冗談かと思って、私が「しかし今となっては鎖は用はないでしょう。この手が逃げるはずはないから」といったら、サー・ローウェルは、
「いや、いつも逃げ出そうとしています。鎖は必要です」
とまじめな声で言った。私は相手は狂人か、それとも私をかつぐつもりかと疑って一瞬相手の顔を見た。相手は穏やかな善良そうな様子である。私は話題を転じた。それでも家具の上に置いてあるピストルが三挺とも弾が装填されており、この英国人がいつ襲われても反撃できるようおさおさ警戒を怠っていないことが知られた。
それから一年経ってサー・ジョン・ローウェルが殺されたという知らせが届く。予審判事は現場に刑事と憲兵と急行する。フランス人の使用人が茫然としている。この男があやしいと当初思ったが、犯人でないことが後でわかった。サロンにサー・ジョンの死体が仰向けに横になっている。チョッキがちぎれ、袖がちぎれ、猛烈な格闘の挙句、首を絞められて殺されていた。黒く脹れた英人の表情はいうにいわれぬ恐怖を示しているかに思われた。歯の間になにかを噛みしめている。首には五六箇所、鉄の先でできたかと思われる裂傷があって血で覆われていた。医師は肉の中に刻まれた指の痕を調べて「まるで骸骨に首を絞められたという感じですな」と言った。ぎょっとした私は壁を見上げた。すると例の干からびた手がない。鎖は切れてぶらさがっている。そこで死人の口の中をしげしげと覗くと第二関節のところで切断されたあの消えた手の指の一本が見つかった。現場検証が始まった。別にこじ開けられたドアはない。窓も家具も元のままである。二頭の番犬は目を覚ましもしなかった。しかし使用人の証言によると、過去一ヶ月来主人は落着きがなかった。手紙が頻繁に来た。片端から焼却処分していた。主人は時々精神異常ではないかと思われるような激しい怒りに任せて馬用の鞭で干からびた手をひっぱたいた。夜は床に就くのは遅かったが、用心深くいつも手元に銃を用意していた。時々誰かと言い争うような大声をあげた。その夜はたまたま物音はしなかった。窓を開けにいったとき使用人はサー・ジョンが殺害されていることに気づいたのである。警察でその後綿密な捜査が行なわれたがなにも見つからなかった。

事件から三ヵ月後、私は恐ろしい夢魔にうなされた。その手が私の家のカーテンや壁に沿ってまるで蠍か蜘蛛のように走り回る。三回目を覚まし、三回また眠り、三回その恐ろしい肉体の断片が私の部屋を疾走するのを見た。指を足のように動かして駆けめぐった。

翌日、サー・ジョン・ローウェルの墓の上で見つかったといってその手が私のところへ届けられた。英国人は身寄りがわからないので当地の墓地に埋葬されたのである。その手は人差し指が欠けていた。

「判事様、それだけでは決着がついたとはいえませんよ。種明かしをしてください」とご婦人連がせがむ。

「種明かしを言ったら興醒めでしょう。私の考えでは手の主は実は死んでいなくて、その手を取り戻しに来た。しかしどうやって家にはいりこんだか、それはわかりません。一種のヴェンデッタでしょう」

「そんなはずはありません」

とご婦人の一人がつぶやいた。

「だから最初から私の説明では皆さん納得しないだろう、と言ったではございませんか」

細大根から蜘蛛へ

モーパッサンの話の組み立て方は上手で、短編小説としてよく出来ている。このモーパッサンの短編がハーンの『因果話』に影を落としている。松林伯円の原話では夜の丑満つ時に雪子の胸を責め悩ます手は「尼が乳房の左右の上より乾しかためたる如くに見ゆる二本の腕」、その状態は「白骨にもならず肉皮も其侭、爪も生へたる形ちさながら」、それを形容して「細大根の如く其色青黒にして死物の如く活物の如し」とあった。それがハーンの英文ではこうなっている。

Withered and bloodless though they seemed, those hands were not dead. At intervals they would stir—stealthily, like great spiders. And nightly thereafter—beginning always at the Hour of the Ox—they would clutch and compress and torture. Only at the Hour of

the Tiger the pain would cease.

原作の細大根のごとき手は大きな蜘蛛に変えられた。そして読者も記憶するように、モーパッサンの短編中では手は判事の部屋を蠍か蜘蛛かのごとく走り回ったのである。すでに牧野氏も指摘しているが、ハーンはモーパッサンの作中で判事が見た悪夢のイメージをここで明らかに踏襲した。参考にハーンの手になるモーパッサン短編の英訳のその条りを引用すると、

...I had a hideous nightmare... I saw the Hand, —the horrible Hand, —running like a scorpion or a spider along the curtains and up and down the walls of my room... using its fingers like so many legs.

というのである。モーパッサンのフランス語原文も参考に引用する。

...j'eus un affreux cauchemar. Il me sembla que je voyais la main, l'horrible main, courir comme un scorpion ou comme une araignée le long de mes rideaux et de mes murs... en remuant les doigts comme des pattes.

正確な英訳ということがわかる。

ハーンは松林伯円原作『百物語』中の「青大根」では迫力に不足すると感じたからであろう。蜘蛛に喩えを改めた。こうして植物でなく生物によって喩えられる時、手も独立した生命力を帯びた存在となる。ハーンでもルファニュでもモーパッサンでも切り離された手はそれ自体が意思ある生き物と化している——松林伯円の場合は「死物の如く活物の如く」と中間的存在の扱いとなっている——ただし、自己の意思ある手のお化けとなったとしても、独立してすばやく動きまわるのはルファニュとモーパッサンの場合のみである。

こうして見てくると怪談には普通主題――『因果話』では「嫉妬」、モーパッサンの『手』では「復讐」――があり、それを作品たらしめる芸術的技巧――今回取り上げた作品ではいずれも切り離された「手」――が加わっていることがわかる。しかもその手にまつわる技巧については『因果話』では日本的特色も見て取ることができる。

母親が子供を抱くのは世界共通だが、背中におんぶするのは日本の風俗である。雪子が奥方をおぶったのもそれが自然だったからであろう。そのために奥方の両手が雪子の乳房に取り付いた。この両手が固着した、というのがルファニュやモーパッサンの短編にない『因果話』の特色である。すると近代日本の怪談である夏目漱石の『夢十夜』にも背中におんぶしたために子供にくっつかれてしまった話のあることが想起される。『第三夜』の小僧がそれで、主人公の「只背中に小さい小僧が食付いてゐる」。離そうにも離せない。そのように固着してしまった、という恐怖から考察すると、『因果話』と『第三夜』を同一カテゴリーに属する怪談として見ることもできるのである。

それでは最後に読者はどの作品を一番好まれるであろうか。松林伯円の『百物語』第十四席か、ハーンの『因果話』か、ルファニュの『手』か、モーパッサンの『手』か。あるいはどの作品を一番嫌いに思われるであろうか。私自身は女の乳房に両手が固着しているという図は手首で切断されているにせよ、腕までついているにせよ、美学的に好きではない。とくに両腕がぶらさがっている図は好きではない。江戸時代の悪趣味が出ているような気がする。

登場人物のスケッチについては説明を略したが、モーパッサンが語るサー・ジョン・ローウェルは豪放な英国人らしく描かれている。フランス語会話で名詞の男女の性を取り違えるこの英国人の話し振りもいかにももっともらしい。というかフランス人モーパッサンがフランス人読者とともにファンタサイズした典型的なジョン・ブルという感じがする。ただしそのような作中人物の記述の巧拙は、いま述べたような怪談としての比較論の際にはあまり重視してはいけないのではないかと思う。白い貴族的な手がいいか、細大根のごとく青白い腕がいいか、全身の皮を剥がされて炎天下で日干しにされた男の黒ずんだ手がいいか、蠍や蜘蛛のように走りまわる手がいいか、という比較論も

もちろんなし得る。ただし「いい」といっても、目で見た感じで「いい」という趣味の問題だけならばそれこそ女子供の判断で、怪談として判断するからにはその中のいずれの手が作品の中で効果的か、ということが評価の基準となるべきではないかと思われる。しかし美的な要素や趣味的な判定もむげに退けるわけにはいかない。

『破られた約束』と西洋世紀末のグロテスク趣味

さて西洋や日本の「手」にまつわる怪談にふれた。それではハーンの中でその手はどのような関係の中で存在したのか、というと西洋の世紀末のグロテスク趣味が日本の怪談の再話の際にも生かされている場面があるように思われる。たとえば先にも名をあげた『破られた約束』(『日本雑録』に収録)という話の場合がそれである。侍は死に行く妻に懇願されて、お前が死んでも再婚しない、と誓った。妻は庭に埋められた。ところが一年も経たぬまに、周囲から責めたてられて、侍は十七歳の花嫁を迎えた。新婚七日目の夜、夫が城中で夜勤の夜、花嫁は物凄い形相をした亡霊に脅された。「出て行け。さもなくばお前を八つ裂きにする」

新婦は夫に打明ける。次の夜も夜勤である。夫は二人の屈強の武士に妻の警護を頼んだ。ところが丑の刻に例の鈴の音が聞こえる。新婦ははっとして警護の武士のところへ駆けつけるが、二人は碁盤の前で凍てついたように硬くなっている。女は悲鳴をあげた。夜が明けて夫が帰ってきて、若妻の首なしの死体が血の海に横たわっているのを見つける。二人の武士はまだ眠っていたが、夫の叫びに飛びあがり茫然とする。血のしたたりの跡をたどると菖蒲が咲く庭先、小路を曲ったところでうかれ騒いでいる悪夢のような魔物と、正面から顔と顔をつきあわせた。とうの昔に埋葬されたはずの前妻が墓の前ににゅっと立ち、一方の手で血の滴る首をさげていた。一人の武士が念仏を唱えるや、刀でその魔物を打った。途端に魔物は土の上に崩れ落ち、空の経帷子と骨と髪とが飛び散った。崩れおちた残骸から、鈴がチリンと転がり出た。

しかし肉の落ちた右の手は、手首から切り離されていたにもかかわらず、まだもがき続けていた。その指は血塗れの首を依然として

しっかと握り締め、それをもぎり、ずたずたに裂こうとしていた――まるで黄色い蟹の鋏が落ちた果物をしっかり掴んで放さぬように。

But the fleshless right hand, though parted from the wrist, still writhed ;――and its fingers still gripped at the bleeding head――and tore, and mangled――as the claws of the yellow crab cling fast to a fallen fruit...

ここでは女の右手に注目したい。亡くなった前妻が新妻を取り殺しに現れる話は、東洋の怪談によくある主題である。ハーンが何に依拠して『破られた約束』を書いたのか、その原拠はまだ同定されていないが、その筋は日本仕込みといっていい。しかしハーンの再話物にしばしば見られる特色だが、大切な細部の色づけはハーンが自分の趣味性を生かして脚色している。この最後の手首で切り離された女の右手の指が「黄色い蟹の鋏が落ちた果物をしっかり掴んで放さぬように」血を流している生首を掴んだまま、それをさらに引き裂こうとしているという記述は、ハーンが若い頃から耽読した西洋起源の怪奇を好む想像力であろう。ジョージ・ヒューズ教授はこれをデカダンス的「フランス感覚派」の影響[iii]と呼んでいる。しかし日本の原話では必ずしも読者を惹きつけない怪談・奇談が、ハーンの再話を経由すると近代の日本人読者にもアッピールするのは、芸術家ハーンのタッチがそこに加えられているからであろう。[iv]

ハーンがアイルランド文学やフランス文学の中で読んだ手にまつわる怪談にはファンタスティックな作品もあれば、芸術的な完成度に疑問のある作品もあった。しかし材源がいずれであれ、「手」が持ち得る戦慄的効果のほどはハーンの脳裏に刻み込まれていた。それが日本物の再話である『因果話』や『破られた約束』――特に後者の結末――で効果的に用いられた、と言えるようである。[v]

註

i　この「異人の蘭方医」a foreigner―a Dutch surgeon という設定は『百物語』の原文の「蘭医」の語をハーンがオランダ人医師と取り違えた可能性もあるが、単なる「蘭方医」よりも「オランダ人の外科医」の方が作品に興趣を添える、と考えての変更という可能性も十分考えられる。「蘭医」を「オランダ流医学の医師」などと訳するのは、文章の単純化をはかるハーンにとっては煩わしすぎることでもあったろう。

ii　断片化する身体はなにも手だけに限らない。アンデルセンの童話『赤い靴』の少女は赤い靴をはいたら足が勝手に踊りだして止まらない。困り果てた少女は、首切り役人に頼んで赤い靴ごと足を切り落としてもらう。ところが義足をつけ松葉杖にすがって少女が教会へ行こうとするとその道

すがら、赤い靴が少女の前方で踊り続けている。赤い靴をはいた足首という身体の一断片が自律した意思のある主体となって悪さを働く恐ろしさは、手首という身体の一断片の悪さに劣るものではない。

iii ジョージ・ヒューズ『ハーンの轍の中で』（研究社、二〇〇二）八八頁。

iv ハーンの手になる『鳥取の布団の話』の再話が日本人読者にアッピールするのも、「兄さん、寒かろう」「お前、寒かろう」と布団が声を立てる、という従来の日本の怪談によくある話の結びに、家を追われた兄弟が、雪の降る夜、外で抱き合って眠っている間に、神様が新しい雪の白い布団を掛けてくれた、という結末を足して一篇の芸術作品に仕立てたからこそ長く記憶されるのであろう。アンデルセンの愛読者ハーンが『マッチ売りの少女』に想を得た結びであることは、牧野陽子氏が『ラフカディオ・ハーン』（中公新書、一九九二年）ですでに指摘したことであるが、読者も感じられることと信じる。

v 本稿は梅本順子日本大学国際関係学部教授を研究代表者とする科学研究書による基盤研究(c)(1)の研究成果報告書『文化の地球化と文学の雑種化』（平成十七年十二月）に掲載した一文にさらに手を加えたものである。